

1. 本年度研究の方向性

(1) 研究主題

対話の中から深い学びを求める授業の創造 ～全員参加の授業づくりを通して～

(2) 主題設定の理由

昨年度は、「対話のある深い学び」をめざして、国語科、算数科における「課題設定の工夫」と「ペア・グループ学習における支援のあり方」を中心に研究を進めてきた。一人ひとりが日々の授業の中で様々な手立てを試み、一人1本以上の授業を公開し、事後研では、子どもたちの姿に学ぶことで、授業改善に取り組んできた。

子どもたちは、ペア・グループ学習にも慣れ、互いに考えを言い合えるようになってきている。対話をしている時の顔はどの子も生き生きとしている。しかし、よく見ると、発表レベルで終わってしまい、「考えを深め高め合った」という実感までには至っていないことが多い。互いの考えを理解し、深め合うことは、子どもたちの発達段階から見てかなり高度な要求である。

「対話のある深い学び」を保障するためにはどうしたらよいのだろうか。

そこで、本年度は、これまで、ペア・グループ学習を中心に取り組んできた「対話的な学び」を、ペア・グループ学習を基盤に据えながら、対話の対象をより広く捉えて実践していく。「一人ひとりの学びを保障する」全員参加の授業を根底に、様々な形の対話の中から「深く学び合う」授業づくりに挑戦してみる。

昨年度同様に「課題設定の工夫」（課題づくり）と「対話のある全員参加の授業をどうつくるか」を柱に、問題解決学習の中に教材や子どもの実態、ねらいに合った対話を位置付け研究を維持推進していく。

その為には、これまでと同様に、互いがかかわり合う素地として、コミュニケーション力の促進や普段からの仲間づくりも必要である。子どもたちが周りの人や物とかかわり合うことで自分自身の高まりを自覚できるような授業づくりの構築こそが「対話のある深い学び」へつながると考える。

(3) 研究の構想

◇主題のめざす子どもの姿とは

「自分や周りの人と進んで対話し、かかわり合うことによって、深く学び合おうとする姿」
自分と対話しながら、根拠を明らかにした自分の考えを持ち、他者との対話で考えを伝え合い、比べ合い、良いところを自分の考えに生かしながらクラス全体でより良い考えに高めていく姿である。

◇「対話の中から深い学びを求める授業」とは

子どもたちが主体的に対話し聴き合うことで、心の交流が図られ、「この考えでいいのか」と自分に問い、自分の考えを見直そうとする姿が見られる授業である。具体的には、次のような自分自身の高まりを感じた時であると捉える。

- ・既習の知識や経験から、自分の力で考えることができたとき
- ・自分の考えを友だちに伝え、認められたとき
- ・友だちの考えがわかり、新しい発見があったとき
- ・学習した新しい考え方（やり方）で問題が解けたとき
- ・自分の力の伸びを感じたとき

このような高まりを感じるためには、相手の考えを尊重しながら、自分の考えを相手に伝えるために、言語や動作化、具体物、ICT機器を使って豊かに表現したり聴いたりする力が必要である。

- ・自分の考えの根拠を既習事項や文章事実から説明する力
- ・自分の考えを式・図・数直線・具体物・ICT機器などを使って説明する力
- ・友だちの考えをイメージ化し、自分の言葉で置き換えながら聴く力
- ・友だちの考えを自分の考えと比べながら聴く力

また、対話の中で互いの考え方を認め合うことは、一人ひとりが大切にされているという実感を持ち、よりよい人間関係が築かれていくことにもつながる。

(4) 研究仮説

主体的に意見を持つことのできる課題設定や対話の工夫をすれば、子どもたちは主体的に考え、学びを深めることができるであろう。

(5) 研究内容

<授業研究>

A 対話を保障するための具体的な支援方法（「対話的な学び」の保障）

- ・授業の中にペア、グループ学習を中心とした「対話的な学び」を位置付ける。
- ・ブロック人権教育の視点を入れる。

B 課題設定と提示の工夫（「主体的な学び」の保障）

- ・「深い学びを支える課題」の追究（「なぜ、どうしての課題」「絞り込んだ課題」などの問題解決学習で）

※A、Bにおいて、授業UD（特別支援教育×教科の本質）の視点から全員参加の授業を考えていく。

<授業を支える日常的な取り組み>

- C 家庭学習、個別指導の充実
- D 学習の決まり、学習規律の見直しと徹底
- E 学級づくり（仲間づくり）

<授業研究>

A 対話を保障するための支援方法について

○本校では、「対話的な学び」を目の前にいる人との対話だけでなく、子どもの思考活動に沿って対話の対象をより広く捉えて、授業の中に位置付けていく。

例えば、「読むこと」の単元の場合、

- ・教材との対話（教材を自分なりに読む）
- ・自己内対話（文章と心の中で対話し自分の考えをつくる）
- ・ペア、グループ学習における対話（考えを伝え合ったり、分からないことを尋ねたりする）
- ・書き手（作者・筆者）との対話（再度、自分の読みをつくる） などがある。

他にも、

- ・先哲との対話
- ・過去や未来の自分との対話
- ・ICT機器、ノート、付箋などを活用した対話
- ・教職員や地域の人との対話 など考えられる。

対話の入り方は、

- ・全体交流前、課題に対する自分の考えを持たせるために対話を入れる。
- ・全体交流後、課題に対する自分の考えを見直したり、はっきりとさせたりするために対話を入れる。
- ・基礎基本の定着（教え合い）のために対話を入れる。
- ・的確に説明できるかを聞き合うために対話を入れる。

等々、様々な場面が考えられる。対話自体が目的ではなく、指導内容（ねらい）のまともに行きつくための手段であり、何のために対話するのか（活動の目的）、対話して何を考えるのか（活動の見通し）を子どもが理解していることが前提にある。

対話することで、

- ① 色々な考えと出会え、自分の考えが広がった。（学習内容のねらいの達成）
- ② 進んで自分の考えを話しやすかった。コミュニケーションできた。（コミュニケーション力の高まり）
- ③ 安心して学習できた。自分の出番があった。（仲間づくり）

を、子どもたちが実感できるような授業をどうつくるかである。

ペア・グループ学習に焦点を当てると、本校では、ペア・グループ学習のルールを

- ① 全員の考えを聴く。
- ② 疑問に思ったことや、もっと聴いてみたいことは質問する。
- ③ 無理に考えはまとめない、一人ひとりの考えを大事にする。

と決め、実践している。話型や司会者を設けるかどうかは学級実態に応じて考えている。
これまでの授業研究（事後研）で、

- 自分の考えを持ち、整理し、教え合うための支援
- ▲「拡散」した考えを「収束」させていく手立て →「まとめ」から遠い子どもの考えからまとめて聴いていったことは効果的 →子どもの考えをどう整理し収束させていくか、教師の聴く力、整理する力が必要 →板書の構造化：分類整理しながら、キーワードを明確にしていく
- ▲「個別の配慮」

等、「発問の工夫（教師の揺さぶり発問や繰り返し発問の設定）」の効果もあげられた。今年度も「対話」することで理解が深まったり広がったりするためには、どのような手立てが必要か探っていく。

○ブロック人権教育の視点とは、

- ・子どもたちの未来を確かなものにする進路・学力保障をすすめる。
- ・被差別の立場にある子どもの思いや願いを中心にすえた、学級づくり、仲間づくりをすすめる。
- ・「なかま」「いのち」「個別の人権課題」を柱に教育内容を創造する。

B（課題設定の工夫）について

◆「めあて」「課題」「深める問い」の捉え

「めあて」～子どもの側から見た今日の学習内容の方向性と捉える。（～しよう。～を考えよう。まとめよう。調べよう）

「めあて」に対しては「振り返り」を位置づけ、整合性を持たせる。

「課題」～教師の側から見たこの時間につける力、ねらいに向けて考えさせることを「課題」と捉える。（「なぜ、どうしての課題」「絞り込んだ課題」）

「課題」に対しては「まとめ」を位置付け、整合性を持たせる。

「深める問い」～子どもが課題を解決する過程で生まれてきた矛盾点・対立する点・疑問などから、ねらいに向けてさらに深めさせる問いとする。

ただし、

柔軟的に位置付け、子どもの主体性を育てていくことが大切。

- ・「めあて」と「課題」の順序にこだわる必要も、必ずしも両方設定する必要もない。
- ・「課題」を設定した場合は、答えを明確にする必要があるので、「まとめ」が必要。
ただし、多様な見方や感じ方を求めるような授業の場合は、「まとめ」よりも「振り返り」を充実させる方が適切な場合がある。
- ・「振り返り」は本時の学びを振り返らせ、自覚するものなので、基本的には全ての授業で設定する。その際、教師が視点を与える。（「めあて」の達成状況についての自己評価や「今日頑張ったこと（次に頑張りたいこと）」「今日新しく気付いたこと」等）

型にこだわるのではなく、教科の特性や単元の展開、本時のねらいに応じて適切に設定し、子どもの思考の流れに沿った展開を考える。

これまでの授業研究（事後研）で、

- 「可視化」による効果
- 「絞り込んだ学習課題」の有効性
- 子どもの課題解釈に違いが見られた時の支援
- ▲「まとめ」との整合性を持たせるために →「深める問い」の位置付け →授業者が明確にねらいを持って課題設定すること
- ▲「主体的学び」となるためには →課題の持たせ方：子どもが引き受けているか？

等、全員が学習課題を理解し共有するための工夫として、「課題は分かりやすく焦点化されたもの」「絞った課題」といった課題設定の工夫がなされた。「対話的な学び」をつくり出すポイントになるであろう課題設定の工夫は重要である。

<「授業を支える日常的な取り組み」について>

「対話的な学び」の土台づくりとして、

◆まず、話を「聴く」ことのできる子に育てる。

- ・「聴く姿勢は足元から」（「みそあじ」運動の「み」：みだしなみの中に「話を聴く姿勢」「言葉遣い」を位置付けた本校スタンダードの1つ）

- ① 正しい姿勢で話し手に視線を向ける
- ② 最後まで聴く
- ③ 反応しながら聴く
- ④ 話し手の考えの中心が何かを捉える。
- ⑤ 話し手の考えに対し、自分の考えを持つ。

◆普段からの人間関係づくり

- ・子どもたちが安心して発言でき、友達の発言を最後までしっかりと聴き合う学級づくりをしていく。そのためには、まず教師が子どもの意見をしっかりと「聴く」。また、普段からわからないことを「わからない。」と言え、わからないことを友達に尋ねる（自ら学ぼうとする）姿が見られるような学級をつくる。

◆円滑なコミュニケーションの進行（話型指導）

- ・かかわる言葉を教える。各教室に掲示してある話型を参考にし、次の学年へと積み上げていく。「～さんと同じで・・・」「～さんと似ていて・・・」「～さんと違って・・・」の3つの話型を意識させ、友達の考えと自分の考えを比べながら最後までしっかりと聴けるようにしていく。（司会を決め、話し合いをパターン化していてもよい）
- ・最小単位のペアでの対話を仕組んでいき、基礎的な力を鍛える。
- ・発言をつなぐ力を鍛える。

◆学習形態の工夫

A：フリートーク（形式にとらわれず自由に）

B：自分の考えを書く→ペア・グループ学習で話し合い

※全体交流はコの字型。1，2年生はペア（男女）。3年生以上は男女混合4人）の小グループが望ましい。

C：ポスターセッションなど学習形態を工夫してみる。（椅子・机を使わず、立ったままのペア・グループ学習など）

教科や学習内容、子どもの実態から判断して工夫する。

◆日常的な対話学習を心がける

・授業だけでなく、日常の場面で対話（話し合いの基本）を重視し、日頃からペア・グループ形態での話し合いや活動を取り入れていく。（積み重ねが大事）

◆本校学習規律や授業に関わって

・学習ルール・筆箱の中身・引き出しの中身・黒板のチョークの色とノートのまとめ方・板書カードの使い方・学習用具の決まり・家庭学習の手引き（低・中・高学年）

(5) 研究の全体計画

◆研究方法

☆全体授業研（第1回1学期、第2回2学期、指導主事招聘）

☆学年部授業研（全体授業研を行わないクラス、2学期までをめぐりに学年部を中心に見合い、授業者に「授業観察シート」をもとに伝える）

☆授業改善研修（学年部で板書写真を持ち寄り研修）

☆ブロック人権（公開研）（1本）

☆初任研授業（年5回）

※板書フォルダ（08柳ヶ浦小学校
→2020年度写真→2020板書
写真）に入れて保管して下さい。
※「振り返りカード」

※教科は、国語・算数

月	研究・実践	月	研究・実践
4	基本構想づくり ・研究主題・研究仮説 ・研究組織・研究年間計画	10	学年部研究授業 ブロック人権公開授業研究会
5	学級実態の分析、学年・学級実践 ・気になる子の情報交換 i pad研修	11	第1回全体研究会、学年部研究授業 ・指導案作成、事後研究会

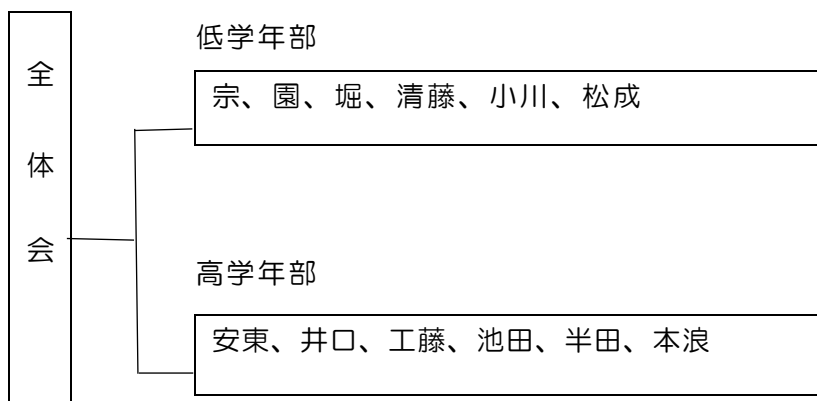
6	学年部研究授業 ・教材研究・指導案審議	1 2	提案授業分析と考察、学年部研究授業 個人授業研
7	1学期のまとめ 学年部研究授業	1	標準学力調査 ・アンケート調査 学年部研究授業
8	研究内容の検討、2学期の研究計画 市人権実践交流会 人権対話学習 校内研究に向けての教材研究 UD研修 英語研修 プログラミング 研修	2	先進校公開研視察 学力調査の分析、考察 各学年の研究のまとめ i p a d研修
9	学年部研究授業、個人授業研 ブロック人権公開授業審議	3	研究のまとめ、来年度研究の方向性

◆研究組織

(1) 研究推進委員

衛藤	正尾	宗(研究)	小川	工藤(教務)
----	----	-------	----	--------

(2) 全体会と学年部会



全体研資料（3）

～今年度の学校教育目標より～

「ふるさとを愛し、学び合い、互いのよさを認め、ねばり強く協働しようとする子どもの育成

「基礎基本を身につけ学び合う子ども」…人の話を聴くことができる子、そして学び合うことができる

《確かな学力》 ○学び合い考えを深める子

○問題解決に向け、自分の考えを表現する子

○先生や友達の話最後まで聞くことができる子

「分かる、できる授業」実践を行い、生きて働く「知識・技能」を習得し子どもを育てる

○基礎学力の定着

・授業力向上に向けた実践研究の充実

・課題解決に向け追求する学習過程

○学び合いの場を重視した学習活動

・ペア、グループ学習の設定

○学習規律の確立（姿勢／聞き方／言葉遣い／準備／時間）

～新学習指導要領の特徴（「新学習指導要領への移行スタート」大分県教育委員会より）～

授業改善のキーワード「主体的・対話的で深い学び」

【実現するための3つの視点】

○主体的な学び

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

○対話的な学び

子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

○深い学び

習得・活用・探求という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

授業づくりのポイント…大分県教育委員会HPや中津教育事務所学校訪問における略案に沿ってポイン

トを絞っています。

【ポイント 1】

「めあて・課題・まとめ・振り返り」の適切な設定と板書の構造化

- (めあて) 付けたい力を身に付けさせるための、本時で目指す「活動のゴールの姿」や「ゴールとそれまでの道筋」。単元や題材の「めあて」を提示することもある。
- (課題) その時間に解決すべき事柄。「なぜ～なのか」「～することはできるだろうか」「どうしたら～できるか」など、疑問形で示すことが多い。
- (まとめ) 本時の課題に対する答え・結論に当たる。
- (振り返り) めあてに対する振り返り。学びの成果を実感させ、学んだことや意欲・問題意識等が次につながられるよう視点を設定することが望ましい。

[記述例] 4年 算数 単元・題材 折れ線グラフ	
ねらい	波線を使ったグラフの特徴について、ベン図を使って波線のないグラフと比較することを通して、理由の説明ができるようにする。
評価規準	(数学的な考え方) 折れ線グラフに表した伴って変わる二つの数量の変化の特徴を考えている。〈ノート観察〉
めあて	折れ線グラフの工夫を説明しよう
課題	Bのグラフの変化が分かりやすいのはなぜか
振り返り	縦の目盛りは波線を使うことで折れ線に必要な部分だけとなり、わかりやすくなる。また、目盛り幅も大きくなるのでわかりやすい。 グラフは表し方の工夫で見るとわかりやすくなる。
まとめ	
学習活動	〈学習活動〉 ○A、Bの折れ線グラフの特徴をベン図で比較する。 ○ベン図をもとに理由をノートに書き、説明、修正する。 ○理由で必要な視点を協議する。

- 「ねらい」は教師のものなので、児童に提示することはない。
- 「めあて」と「課題」の順序にこだわる必要はない。必ずしも両方設定する必要はない。
- 「課題」設定した場合は、答えを明確にする必要があるので、「まとめ」が必要である。
- ただし、多様な見方や感じ方を求める授業の場合は、「まとめ」よりも「振り返り」を充実させる方が適切な場合がある。
- 「振り返り」は本時の学びを振り返らせ自覚させるものなので、基本的には全ての授業で設定する。
- 「振り返り」は教師が本時で最も振り返らせたいことを明確に持っていて視点を与える必要がある。
- 教科の特性や単元の展開、本時のねらいに応じて適切に設定することが大切である。

(学習過程)

学習活動	教師の活動	子どもの活動
<p>○復習（5分以内で）</p> <p>1. 出会う</p> <p>2. 考えを持つ （一人学び）</p> <p>3. 伝え合う 深め合う （集団学び）</p> <p>4. まとめ 生かす （振り返り）</p>	<p>○前時を振り返る。 復習 のプレート位置づける。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 掲示物で ・ 教科書で ・ 板書で </p> <p>○めあてや課題を提示する。 めあて （作業課題）のプレートを位置づける。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 白色の四角で囲む。 <p>※常に出さなくても良い。</p> かだい 課題 （追求課題）のプレートを位置づける。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 黄色のチョークで囲む。 ・ 疑問形の文章で。 </p> <p>○自分の考えをノートに書けているか 机間指導する。</p> <p>○考えを出し合わせ深めさせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ペア学習 ・ グループ学習 ・ 全体学習 <p>※ホワイトボードにグループで話し合ったことを書いて位置づける。</p> <p>※ネームプレートで各自の考えを位置づけ、考えが変わったらネームプレートを裏返す。移動させる。</p> </p> <p>○課題に対するまとめをする。 まとめ のプレートを位置づける。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの言葉や教師の言葉でまとめたことを赤で囲む。 ・ 子どもに読ませる。 ふり返り のプレートを位置づける <ul style="list-style-type: none"> ・ 本時のめあてが達成できたかを確認させる。 </p>	<p>○必要な時は、ノートに書く。 （例、算数の計算） ※時間をかけない。</p> <p>○めあての内容を黒鉛筆で書き、四角囲みする。 ※定規を使う。</p> <p>○課題の内容を鉛筆で書き、青色で四角囲みする。 ※定規を使う。</p> <p>○自分の考えをノートに書く。</p> <p>○考えを出し合い、話し合う。 友だちの考えと自分の考えを比較して書く。</p> <p>○まとめたことを鉛筆で書き、赤色で四角囲みする。 ※定規を使う。</p>

【ポイント2】

習熟の程度に応じた指導のための評価規準の具体化

○本時の評価規準

- 単元や題材の評価規準、評価計画に基づき、本時の教材・学習活動から、指導者が「おおむね満足できる状況」を設定する。
- その際、「B おおむね満足できる状況」と「C 努力を要する状況」との区別ができるところまで具現化して設定することが大切。

○本時の中で「C 努力を要する状況」の児童に手立てを講じ、全ての児童を「B おおむね満足できる状況」まで到達させることを目指す。

【ポイント3】

問題解決的な展開の授業の類型を意識した指導計画の作成

○単元や題材の展開全体が問題解決的になる場合と

1 単位時間などのまとまりで問題解決的な展開になる場合とがある。

○生徒指導の3機能を意識した問題解決的な展開の授業は、2～4になる。

習得・活用・探究の学びの過程で、意図的・計画的に1～4を選択、設定することが必要。

○教科の特質を踏まえて習得すべき事柄を明確にし、それらの確実な習得を図る。

教育的授業類型
1 教師主導の講義・実習・習熟型授業
2 教師主導の課題解決学習 (学習課題・追求方法とも教師が)
3 児童主体の課題解決学習 (学習課題は教師・追求方法は児童が)
4 問題解決学習 (学習課題・追求方法とも児童が)

藤村裕一氏（鳴門教育大学大学院）による

【ポイント4】

筋の通った指導案で授業の作成

(1) 単元（題材）の指導計画

- 付けたい力は明確か。（単元の目標、評価規準や評価場面）
- 学習展開は適切か。（単元の設定の仕方）
- 教材や言語活動の解釈は適切か。

(2) 本時案

- 本時の「ねらい」は適切かつ明確か。
- 本時の評価規準は、「ねらい」と対応しているか。

生徒指導の3機能

- 1 自己決定の場を与える(考えをもつ)
- 2 自己存在感を与える(発表・発信)
- 3 共感的人間関係を育む(認め合う)

(ねらいの書き方)

○A 学習内容（～を、～について）

B 学習活動（○○を通して、○○と比べて、○○でまとめて、○○することにより）

C 育成を目指す資質・能力（△△できるようにする、△△に気づくようにする、△△を高める等）

○A～Cの3つの要素を入れる。

○Bにおいては、考えさせるための技法を意識する。